目　　次

二神氏の系譜研究について
法政大学講師　福川一徳先生　・・・・・・・・　２

「海の民　ふたがみ」の創刊に際して
二神系譜研究会会長　二神浩三　・・・・・・・・　４

シリーズ
二神氏ゆかりの地を訪ねて　愛媛県北条市・・・・・・・　６
系譜・家紋紹介　・・・・・・・・・・・・・・・・２０
二神氏苗字の歴史　・・・・・・・・・・・・・・・２２
二神人物伝　・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２
事務局長　二神英臣

豊田種長追善供養祭と館の椿
会長　二神浩三　・２６

七大夫　常任理事　二神重則　・３０

役員のつぶやき
二神島と私　理事　二神康郎　・３４
宗閑殿と私　常任理事　二神興三郎・３６
系譜研究会との出会い　常任理事　二神博文　・３８
二神さんて、何人いるの？　常任理事　二神重則　・４０

第一回　二神島交流会記念講演会　１９９９年５月３０日
神奈川大学常民文化研究所　関口博巨先生　・４２

二神系譜研究会会則　・・・・・・・・・・・・・・・・・５８
二神系譜研究会役員名簿　・・・・・・・・・・・・・・・６０
二神系譜研究会入会申込書　・・・・・・・・・・・・・・６１

二神氏の系譜研究について

法政大学講師　　福川　一徳先生

一昨年、縁あって、二神系譜研究会の発足に立ち会い、はや１年半がたちました。この間、幹事の方々のご努力の甲斐あって、入会会員は着実に増え、この度は会誌も刊行されるとの事、貴会の今後のご発展を祈念いたします。

さて、三十年程前、私は豊後大友氏の研究をしていたので、周辺の関係大名・国人にも関心があり、伊予の国人たちについても少しずつ調べ始めたのです。特に二神氏が、来島氏の重臣としてしばしば豊後大友氏へ使いし、豊後と深い関係にあったことは大友関係文書によって知ることができます。しかし、そのころは二神氏のご子孫の方々との接点がなかったため、二神氏相互の関係が分からず、調査研究も開店休業状態となっていました。その後十数年前、大分市で片山二神文書の原本が発見されたのを機に、本格的に二神氏について研究を始めました。

二神氏の系譜については、研究会の方々のお力で愛媛県内の主な系図が集められ、近世以降の伊予二神一族の関係はほぼ分かってきました。しかし、現存する古文書から見る、戦国期二神氏の系譜は、二神諸家の系図の示すところとは大いに異なっている。残念ながら、これらの系図によっては近世以前の二神諸家の関係を明らかにすることはできない。

これらの課題については今後信頼できる古文書や記録類を発掘、研究し、一つ一つ解明していかざるを得ないと思われる。

二神氏の系譜を研究していく上での最近の大発見は、何といっても、善応寺の隼人佐通範夫妻の画像であろう。通範夫妻の死後間もなく、その子らによって供養のため作成され善応寺に納めら

れたのであろう。通範は元和２年に亡くなったが、天文１５年に、河野弾上少弼通直から親父信濃守の跡式を安堵されているから、相当な長寿者であったことになる。伊予の二神氏が、いずれも通範を中興の祖として自家の系譜の中心に据えているのは故無しとしない。通範の存在は今後とも二神氏の系譜研究の題材として検討していかねばならないでしょう。

ご存知のように、伊予来島氏は・・・関が原の敗戦で豊後森に転封されましたが、来島康親に随行した重臣たちの中に二神氏がいました。玖珠郡に入った二神氏は田兵衛種則の子孫および修理進の子孫らであった。二神田兵衛は戦国末期、二神一族を統率する惣領で､天文～永禄年間は来島通康の家老として活躍している。その孫長右衛門・五左衛門は初期森藩の重臣に列した。しかし、家伝文書は残っておらず、その事績は他家の古文書に見るのみである。長右衛門の跡式は来島家から伝兵衛種親が入って継ぎ、得能氏と称した。また、五左衛門家は近代になって絶え、橋爪氏が家を継いでいる。

修理進の子孫は、嘉鑑の代に暇を出され、娘の婚家を頼って豊後竹田に移り住むが、安永年間に絶え、家伝文書は親類の林家に伝えられた。ちなみに、修理進関係の文書写本は伊予北条の片山二神家に伝えられており、かつて両者は近い関係にあったことがうかがわれる。ともあれ、玖珠二神氏の諸家は江戸末期までに何れも絶え、その名跡は得能・橋爪・林氏らによって継承された。そして、直系男子の夭折・養子縁組の連続する中で、二神家の伝来文書もまた散逸してしまった。

一方、伊予に残った二神氏は、大きく中島系と北条系の、２系統に分けられよう。中島系の本流は二神文書の伝来者であった二神司朗家で、その分流は忽那島にも進出し、江戸期には同地の庄屋・神職などを勤めた。北条系の二神氏は柳原・片山・常竹の３家に分かれ、江戸期にはいずれもその地の庄屋を世襲し、医家・商家を兼業し、また、松山藩に出仕した者もあった。この系統の二神諸家は江戸期、大量の文書を残しているので、これらの研究によりその事績を明らかにしえよう。

他にも、宇和郡二神氏のように、未だ関係がはっきりしないが、伊予にはなお数系統の二神氏が存在する。

これまで述べてきたように、二神氏の系譜についてはまだまだ疑問な点が多いのですが、今後、研究会の調査が進むに従い、次第に明らかになっていくことでしょう。

「海の民　ふたがみ」の創刊に際して

二神系譜研究会会長　二神　浩三

２０００年と云う記念すべき年に、会報「海の民　ふたがみ」の創刊号を発刊する運びとなりました。会報名を何とするかについて色々議論をしましたが、結局、二神氏発祥の歴史を思うとき、二神島において活躍した二神氏のご先祖に因んで、また、二神家に伝わってきた墓石群と古文書との調査を長年に亘って続けてこられた網野善彦先生が名付け親の「海民」と云う歴史観に、えも云われぬ愛着を覚え、海の民を採用しましたが、二神のルーツを辿る当会の目的を考え、二神をいれようと云うことになったものの漢字のままでは、一般の人々に正しく読んで貰えないかもしれないと、平仮名でふたがみと付すことにした次第です。

約１年間の準備期間をおいて、２０００年３月に二神氏の系譜を研究するための準備会と云う長い名称から「二神系譜研究会」にその名を改め、気を引き締めて二神の歴史の調査研究に邁進することになりました。この１年、あるいはもっと以前からの調査で明らかになった事も沢山ありました。それらにつきましては、これまでのニュースや冊子に、その都度報告してきた所です。当会のお世話をしている私どもも、まさかこれ程の成果が挙がろうとは夢にも思っていませんでした。各個人のお宅に代々伝えられてきていた貴重な資料のご提供と有為な情報のご提供があったからだと心から感謝申し上げます。また、中世、近世の歴史がご専門の多くの先生方による古文書や墓碑名の解読と解説がなければ、短期間にこれ程の解明はなし得なかったことと思います。

お互いに「二神」と云う全国でも珍しい名字を持ってはいるものの、そのルーツについての知識は殆どの方がお持ちでなかったのではないかと思います。ニカミとかニシンとか呼ばれて戸惑った方もいらっしゃることと思います。しかし、ルーツを求めての旅は、何となくロマンチックな味を漂わせてくれるものでした。予測をたてて、ある所を訪ねてみると、そこには予測以上の歴史が埋もれていることに驚き、更に掘り下げて見ると、いろんな方の過ぎ越し生き

ざまにぶつかり、思わず快哉を叫びたくなるような感動が込み上げて参りました。元来、歴史には興味のなかった自分でしたが、二神氏の生きた歴史を繙くうちに、何時しか中世、近世の歴史の世界にのめり込んでしまっている自分自身に不思議な力とご縁を感じているところです。

１９４４年、中学時代に陸士か海兵かの選択肢で、配属将校の期待に反して海兵を選んだこと、中国新聞に連載されていた瀬戸内水軍の歴史に出会えたこと、１９９５年８月に二神島で開催された「二神島シンポジウム」に参加し、網野善彦先生と出会ったこと、その年の９月に山口県豊浦郡豊田町一ノ瀬で開かれた「豊田種長追善供養祭」に参列したこと、二神島にあるご先祖の墓石群を見学したこと、北条市の善応寺で通範夫妻の供養絵図を発見したこと、また、その墓石が片山の二神墓地で発見できたこと、秀吉の朝鮮出兵に参加し、持ち帰ったとされる虎の頭や武具が見つかったこと、二神栗舎の掛け軸が見つかったこと等々、全て偶然の出来事で、私どもの力以上の何かの力で導かれているような気がする今日です。

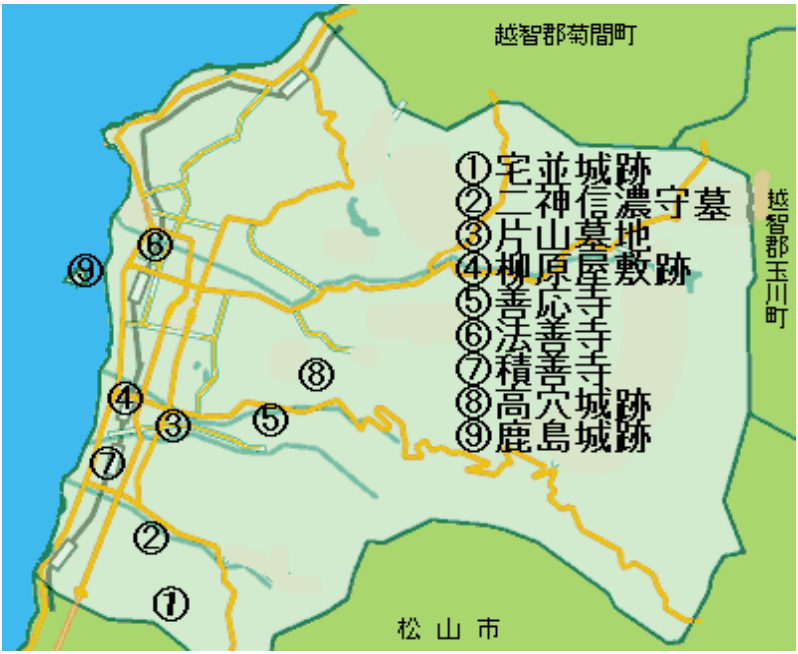
しかし、まだまだ未知のまま埋もれている多くの歴史があり、私達との出会いを待っている多くのご先祖がいらっしゃるものと思います。それらの歴史の調査・研究は単に二神氏の歴史のみでなく、河野氏、村上氏、忽那氏等の歴史にも関連し、伊予の歴史あるいは瀬戸内水軍の歴史にも光明をあてることになるものと考えます。これからも弛まずに、それらの歴史の発掘と調査を進めていき、ゆくゆくは二神島に二神記念館を建設し、二神氏の心の故郷を作ることが出来ればと夢を膨らませています。今後ともお力添えの程お願いする次第です。

二神氏ゆかりの地を訪ねて

Ｎｏ．１

事務局長　二神　英臣

二神氏が生まれて６７０年の歳月が流れましたが、この間、二神島から始まり、風早地方、南宇和地方、土佐小才角、松山地方、東予地方など各地に広がりを見せました。さらに明治維新を経て、京阪神、高度成長の時代には東京を中心に関東地方や遠く東北、北海道など今日では全国のかなりの地域に住まわれています。世は国際化時代を迎え２１世紀には世界にまで二神氏が活躍することになることが予想されます。その様な時代であればこそ、川の流れと同様にその原点、源流を確認しておくことが必要ではないかと考える次第です。



このコーナーでは二神氏がその時代、時代に広がった地方、地域を訪ねそこに残る二神氏に関連する史跡等の紹介をして参ります。第１回目は愛媛県北条市を紹介します。

北条市はかつて風早郡と呼ばれ、明治２２年迄は二神島と同じ行政地にありました。この地に二神氏が初めてやってきたのは１３６７年(正平 22)時の伊豫国守護河野通尭に誘われてからのことです。以来１５８５年(天正 13)河野氏が滅亡するまで、この地を中心に二神氏の足跡が多く残されています。その主なものを訪ねてみました。

【宅並城跡】

二神氏３代目の二神種直が河野氏の家臣団として二神島から初めて本土に上がりその本拠としたのが、松山市と北条市との境に聳える標高２００．１ｍの宅並城でした。

１３６７年(正平２２)河野通尭が讃岐の細川氏の勢力を追い払って伊豫国の権勢を回復した時、これまでの戦功によって二神種直は風早郡の領地を給与され、小川村に聳える宅並城を拠点とし、河野氏の重臣としての地位を維持するようになりました。

その後、宅並城は種直の子の家直、孫の家真と引き継がれ二神氏が城主の任に就いています。（二神氏系図伝書略記）

二神氏が宅並城主としたのは記録ではこの三代だけで、その後は活躍の舞台を風早郡の北方面に拡げ、古文書に残る給与された土地などもほとんどがその地域に移って行きます。

海上より宅並山城、高縄山遠望

宅並城が初めて文献に現れるのは、１４６５年(寛正 6)讃岐の細川勝元が伊豫国に侵入した時、河野通春を援助した大内政弘の軍が宅並城に拠ったことや、１４７９年(文明1)細川義春軍が伊予に侵入した時、高穴城、神途城とともに防戦の要衝となっていることが等が『予陽河野家譜』に述べられています。しかし、これらは二神氏が宅並城を去ったあとの事件で、寛正６年は二神家真の子、種が道後湯築城で河野教通のために奮闘し戦死した年に当たり、二神氏の活躍の舞台は道後平野まで広がっていて、宅並城との関わりでは記録に残っている範囲では二神氏が最も歴史が古いと云えます。

ちなみに宅並城の創建は１３３４～１３３８年(建武年間)と云われ創建者も不明。そして最後の城主は栗上左右衛門尉で、１５８５年(天正 13)河野氏の滅亡とともに廃城となりました。

宅並城と二神氏に関した伝承話が小川二神氏には残されており「宅並城の麓にヤイト場と云うところがあるが、戦国の昔二神氏が軍馬にヤイトを据えていたところ敵に後ろから斬り殺された場所である」「宅並山の麓にある古い墓石は昔宅並城と雄甲・雌甲が争った時、二神氏が挟み撃ちにされて戦死した場所である」と云うようなもので、その場所は今も残されており、2000 年 12 月小川二神氏の敷地に残る無数の五輪墓石群を調査した東国歴史考古学研究所の田代郁夫所長はこれらのものが南北朝から室町時代のものであることを指摘しています。なお、二神氏一族の集団として宅並二神衆がありますが実態については未解明のままとなっており今後、宅並城に最も近い小川二神氏との関係で調査研究が期待されます。

【二神信濃守と一族の墓】

北条市磯河内にあり、宅並城主二神信濃守の供養塔と伝えられる宝篋印塔と大小の五輪塔で、墓地が構成されています。宅並城主となったのは二神種直、家直、家真の三名で(二神系図伝書略記)その内

官職名の信濃守を名乗ったのは三代目城主の二神家真だけです。
　とすれば、この宝篋印塔は二神家真を供養したものであると云えます。

　しかし､この家真の叔父に当たる人に家経(城辺二神氏の祖)がおり、その人物が「二神家経の口上書」と云う古文書が残していますが、それには「始め豊田と申し候えども二神島より河野家へ参り候ゆえ、それより二神と名乗り申す由、申し伝え候(中略)河野家にても風早郡の内、宅並と申す城には私の祖父信濃と申す者預かり居り候･･･(後略)」などと書かれていて、系図の上から見ると続柄が合わない事になり、口上書について、今後の検証が必要です。
　また『伊予郡郷俚諺集』や『予陽塵芥集』にも「宅並城、小川村、二神信濃守の古城」とあり二神信濃守が宅並城主で、その一族の供養墓地であることには違いありません。この宝篋印塔や五輪墓石について「室町時代のものと近世のものとが混在しています。おそらく以前からあったものに加えて、近世に追善供養のため製作したものでしょうその様な例は各地にありますから・・・」前述の東国歴史考古学研究所の田代所長はこのように語っています。

【片山墓地】
　北条市片山にある片山二神氏、土井二神氏等の墓地で全体で５０基近い墓石が並んでいます。これらの墓石の人物は一部しか判明されていませんが、特に昨年初めに大発見となった二神通範(樹枝道種居士・元和 2 年 7 月 15 日歿)とその夫人(仙窓理心大姉･慶安 4 年 6 月 10 日歿)の五輪墓石を始め、風早二神氏の祖二神種範(長慶院宗閑信士・慶安 3 年 10 月 8 日歿)の墓石などが特定されました。その他の墓石についても菩提寺の法善寺の過去帳や片山二神文書の

記述と照合作業が進めば可成り解明されます。

特に今春、本島二神氏の墓地遺跡発掘調査で種範の甥に当たる家種の墓石が発見されているだけに、家種の父、つまり種範の兄通種の墓石の所在地が本島の西畠なのか、片山墓地なのかが焦点になってきました。このように中世から近世にかけた分かれ目の二神氏の墓石が集中しているのがこの片山墓地であると云えます。

【柳原二神城跡】

北条市柳原にあった土井二神氏の屋敷跡のことで、１８９４年(明治２７)まで存在しました。

土井二神氏は二神氏七代目二神通範の孫に当たる二神種昌を初代としています。種昌から九代目種成まで柳原の大庄屋として松山藩の郷士の身分を保持しながらこの場所で任務に当たっていました。人々は堀に巡らされたこの大庄屋屋敷のことを「二神城」と呼んでいました。

昨年の秋、北条市内の日蓮宗法善寺に保管されていた襖の下張りから偶然に発見された法善寺二神文書はこの「二神城」で使用していたもので、明治２７年以降土井二神氏とゆかりの深い法善寺に回されていたものです。この古文書は数百枚にも及び、幕末の柳原二神大庄屋を巡る状況が具体的に解明できる可能性のある物です。一刻も早い解明

作業が期待され

また、この屋敷には文禄・慶長の役に来島越後守通総の配下として朝鮮平壌に従軍した際、二神通種、種範兄弟が朝鮮の女の子を連れて帰国しました。

二神氏柳原屋敷跡

堀や土塀があったとされる跡に立つ二神英臣事務局長

そのことについて「稚女ハ兄弟ニ給リ召連レ帰朝之後、種範家ニ在テ慶安三年六月相果、諸家ニハ不知於当家珍事トシテ記之者也」(片山二神文書)との記述があり、連れ帰った朝鮮の女の子が慶安三年六月に亡くなったとの記録も明確です。そのお墓のことを高麗塚と呼び最近まで二神城跡にあったと云われます。現在の屋敷跡は殆どが畑になっていて、建物は何もなく、河野神社と書かれた祠がその場所に建っています。発掘をすれば当時の物が出てくる可能性が充分考えられます

【善応寺と二神通範絵図】

善応寺の蔵から二神通範の追善供養絵図が発見されたのは１９９８年(平成１０)１２月の事でした。

二神氏の歴史の中で、この人物ほど活躍した例を現在までの所確認していませんが客観的にみて、中世から近世への時代の移り変わり目に存在したからこそそれだけの活躍の舞台があったのかも知れません。その点で云えば時代が人物を要望したのだと云えるかも知れません。

それではなぜ通範の絵図がこの寺に存在したかについて考えてみました。臨済宗東福寺派の善応寺は河野氏の菩提寺として１３３５年(建武 2)に河野通盛によって創営され、代々河野氏の帰依を受け盛観を呈してきましたが、１５８５年(天正 13)年７月河野氏の滅亡と共に戦火に焼失、荒廃しました。その後約百年間は無住職の時代があり、この時代に善応寺の重要な物が逸散してしまいました。

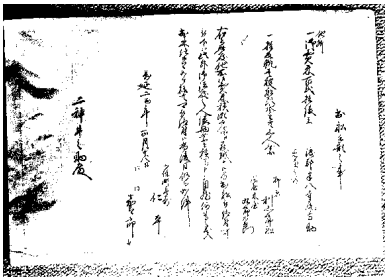
「豊田二神嫡流系図写」には通範の名前について「此二字自後善応寺殿給之自・・・」とあり、善応寺殿、つまり通範の名前は河野氏代々の名前に付ける通の字を河野通直から頂いたことが記されています。通範はそれ程までに善応寺とつまり河野氏と深い関係にあったと云うことです。それが河野氏の滅亡とともに善応寺も荒廃し、そのうち河野通直も病死してしまいます。通直の菩提を弔っていた通範も１６１６年(元和 2 年 7 月)に亡くなりましたが、荒廃したままの善応寺で弔うことが出来ないため、比較的戦国

武士が多く信仰した日蓮宗法善寺に弔うことになったと考えられます。その後、善応寺が再建された１７世紀に入ってからは後の余戸二神氏の祖になる二神氏が檀家として入ってきました。通範の二百回忌にあたる１８１５年(文化12)片山二神氏の二神種方がかつて河野氏の菩提寺だった善応寺に絵図を持って追善供養をしたものであることが考えられます。

【法善寺】

片山二神氏の菩提寺。日蓮宗法善寺は１５７０年(元亀元)２月１５日、本妙院日法上人の開基によって上難波寺之谷に創建されました。しかし、隣寺の火災を契機に、これより前、１２２３年(貞応 2)3 月 28 日北条の埋め立ての際、人柱となった多喜姫と松姫の二人の女性の菩提を弔うために埋葬の地である現在の中心街へ移転し、北条風早の地の安泰を祈る本化の道場として今日に至っています。

この法善寺が片山二神氏の菩提寺となったのが何時の時代であるのかについての調査は進んでいませんが、これまでの調査では、二神種範(長慶院宗閑信士・慶安 3 年 10 月 8 日歿)の過去帳が最も古い人物であることや、法善寺が創建された年代とを勘案すれば、種範の時代と考えるのが自然であると思えます。片山墓地にある墓石のうちで法善寺に過去帳の記録が残されているのは２４霊で、年代で云えば、種範の１６５０年(慶安 3)から１７５９年(宝暦 9)までとなっています。ただ、法善寺７世の日逢上人が１７３１年(享保 16 年 8 月 17 日)隠居寺として檀家４０軒とともに鹿峰に積善寺を創建したため、片山二神氏もこれに同行しました。



法善寺で見つかった
文書の一部

ところが、積善寺が明治になって火災に遭い過去帳の全てが焼失したため、積善寺に移って以降の片山二神氏に関わる過去帳の記録は不明となったままです。法善寺時代の過去帳の記録は現在の村口泰則副住職の手によって調査を進める中で解明されたものです。

なお、法善寺に残る記録の中に、陶晴賢に亡ぼされた大内義隆の子、幾代丸が天正の頃北条に隠棲し、名前も豊田幾之進と改め酒屋を開き世を忍んだとの話があり、その墓ではないかと云われる立派な五輪墓石も残されています。また、大内義隆の母は長門国豊田氏の出身であるとも云われ、幾代丸が北条に追っ手を逃れてやってきた理由が、豊田氏と二神氏との関係を頼ってのものではないかとの推測も考えられます。そのようなことに因み、法善寺境内には豊田町から運んできた「館の椿」が植えられています。

【積善寺】

常竹二神氏菩提寺。日蓮宗法善寺7世の日逢上人の隠居寺として1731年（享保16年8月17日）に檀家40軒を持って鹿峰に創建しました。日逢上人は、鹿峰在住の豊田作次郎の二男で俗名茂之進と呼んでいました。有徳の僧で有ったため帰依する者が多く、北条辻町繁栄の基礎を築いたと云われています。

積善寺創建に伴い、片山二神氏24霊も積善寺に移動してきましたが、それ以外の常竹二神氏の過去帳もこれらの中に有りました。法善寺に残されていた二神氏に関わる過去帳は、日逢上人が隠居をする享保16年8月までの分につい

ては全て判明をしています。これを手がかりに風早二神氏の中で日蓮宗の二神氏については逐次判明をして行くことが予想されます。

積善寺は明治時代に火災に遭い全ての過去帳を焼失してしまいましたが、法善寺の記録から逐次復刻出来る可能性が出てきたことは心強い限りです。

法善寺の門を入った左手に大きなソテツがあります。これは柳原古町の二神氏が医業を廃業したときに屋敷にあった大きなソテツを移植したものであると寺伝にありますがここに云う二神氏とは土井二神氏のことだと云えます。

また積善寺には二神氏が建立した一字一石功徳碑が残されています。それには「二神輿茂作喜種・唯心院宗有日法」とあり、寛保四（1744）甲子歳三月とあります。

この二神喜種は功徳碑を建てた二年後の延享３（1746）11 月 21 日に亡くなっており、その過去帳は現在法善寺に残られていて、位牌は法善寺の項で説明した豊田幾之進の分家子孫に当たり、現在北条市辻町に住んでおられる豊田祥平氏がお祀りされています。二神喜種の位牌がなぜ現在、かつて周防大内氏の末裔と伝えられる豊田氏の家にあるのか、今後、大内氏－豊田氏－二神氏－風早郷－二神島－北条と繋がって行く関係の解明が求められ、北条豊田氏の伝承話、過去帳、位牌、墓地など含めた調査が必要で、この糸口から新たな大発見に続く可能性があると考えられます。

大きなソテツの見える境内

【一心庵】

北条市柳原にある一心庵には北条市指定の文化財としても知られる数多くの遺跡か残されています。それらの中には伊予国大洲藩二代藩主加藤泰興公「円明院殿月窓定心大居士」の位牌、河野氏の重臣得居半右衛門尉通之をはじめとする得居一族の墓石群、河野通信の母の出身、安芸沼田氏一族の五輪墓石群などがあります。

一心庵は元々、河野氏の全盛時代土居の館にあった庵のうちの一つの名称です。

柳原に一心庵が建立されたのは、善応寺に残る古い記録から 1757 年（宝暦 6 ）であることが判明し、その建立に関わったのが二神氏で、「推時、宝暦七丑天、大日本國豫州風早郡於河野郷柳原町奉造建千観音大士堂一申巷為其施主也二神姓為…」と書かれた一心庵に残る古札が残されています。また、一心庵の備品の中に「念仏数珠と鉦」があり、それには「寛政五年（1793）二神源五郎母菩提の為」と書かれており、一心庵と二神氏との密接な関係が浮かび上がってきます。

一心庵には二つの系譜の二神氏の墓地が残されていますが、一つは明治初年に片山村里正をしていた二神源五郎種恒の系譜で、墓石の戒名から宗派は日蓮宗、過去帳は法善寺に残されています。墓石は二十数基あり、享保、元文、安永、天明、寛政頃のものが確認されています。この系譜は、屋号を米源と呼ばれていましたが、現在までのところ直系、傍系ともに子孫は未確認となっています。「終戦直後、東京から見えられたと云う二神さんがこの墓地にお参りに来ました。その時以来、子孫を名乗る人で訪ねてきた人は一人もいません…」一心庵のお世話を半世紀以上に渡って行っている椋名享氏はこのように話しています。

二神氏の名前文化、墓地の位置などから推察して、片山二神氏、土井二神氏との関係が考えられますが、最も時代の近い 1913 年（大正２）11 月 1 日歿の「当家九代二神種英」の墓石あたりを手がかりに調査、解明が求められています。

もう一つの系譜の墓石群は、数も少ない上、時代も浅く、現在の子孫はこれまでに判明していますが、株家については明確になっておらず、今後下からの解明調査に期待がかかるところです。

【高穴城跡】

善応寺の奥地、河野川の上流に立地する高穴城は、１５８５年(天正 13)二神通範と二神一族が、小早川隆景の攻撃によって落城の際、宇佐美、目見田、尾越、難波の各氏とともに最後まで奮闘し戦った城です。この場面を『河野盛衰物語』は次のように描いています。「隆景は更に桂左衛門太夫その他をして高穴城を攻撃せしめた。この城は二神一族並びに宇佐美、目見田、尾越以下難波衆が相集まって守る処である。元来この城は山高く、谷深く四方峻険であって中国の諸将は谷を隔てて西北の峰に陣をとって連日戦ったが落城しない。隆景は大いに怒って自ら兵を進め、懸崖をよじ登って戦い、遂に外郭を攻め破った。城中騒いで防戦に躍起となったが適わず〝遂に逃亡したが射たるる者百余人に達した。隆景は更に鹿島城を攻め落とし、善応寺城を攻撃した。」

二神氏と高穴城との関係は以上の様なものですが、この城は、河野郷土居館(善応寺)の防御線として重要な城で、高縄山への入口を占める高さ 297ｍの急峻な山城で１１８０年(治承 4)にはこの城の存在が記録されています。現在は城郭、空堀、石垣、井戸が残されています。

高穴城遠望

【鹿島城跡】

北条市の沖４００ｍ瀬戸内海に浮かぶ鹿島城の歴史は古く、大和朝廷の時代、白村江の戦いで敗れた後、唐・新羅連合軍の反撃を恐れ、対馬、筑紫、瀬戸内の海防城を築きました。鹿島城はその内の一つとして築かれたもので、河野氏の時代になった建武年間(1334～1336)に今岡通任の手によって現在の階段式連郭構造の鹿島城となりました。

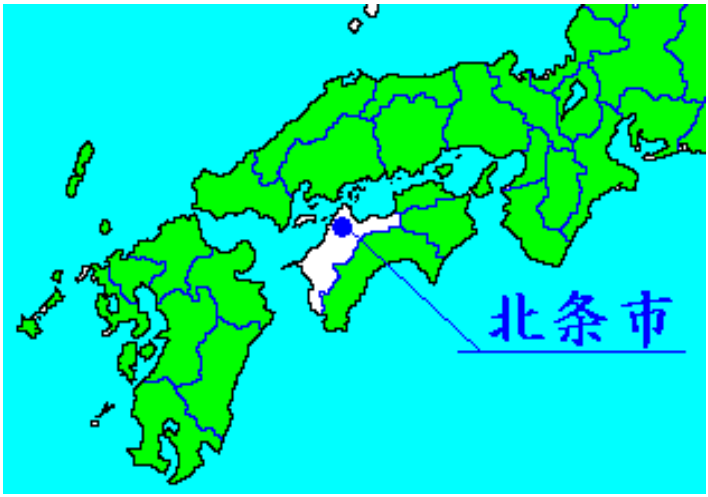
二神氏と鹿島城との関係は、二神豊前守が来島通康の城代としてこの鹿島城を預かっていたことが記録されています。「辻村の海上鹿島の山頂に在り久留島氏の属城にして二神豊前守城代たり・・・」(宮脇通赫著・伊予温古録)

しかし、この二神豊前守と云う人物についての確定が現在までの所出来ていません。来島氏は通康時代の後期ころから秀吉との関係が深くなり河野氏に離反するようになってきます。小早川隆景が四国に進攻してきた頃には二神氏は通範のように河野氏側にいた系譜と来島氏の配下で、小早川側にいた系譜とがあったと考えられます。

後に、秀吉が天下統一を遂げ、文禄・慶長の役、関ヶ原の戦いを経て、来島康親が豊後森に転封なる時まで来島氏と密接な関係にあった二神氏の系譜は今のところ定かでなく、来年豊後森での学習交流会に向けての調査・研究の課

題と云えます。

何れにしても鹿島城を二神氏が来島氏の城代として守っていたことは歴史の事実として、ここから出発しての事実の発掘に期待がかかります。



系譜・家紋紹介　Ｎｏ．１

事務局長　　二神　英臣

本欄では各地の二神氏の系譜と家紋を紹介し、会員の皆様の系譜調査に役に立つような内容にしております。

系譜の分類は、皆さんのご先祖が、幕末あるいは明治初期に住んでいた地方、地区の名前を取って行っています。

それは、この時代までは居住や職業選択の自由がなく、二神氏が全国に拡がって行く以前の系譜の分布状況が確認できると考えられるからです。自分の家の家紋とも照合しながら調査を進めてみて下さい。

本島二神氏

二神氏の系譜の中でも宗家中の宗家の系譜で「豊田二神嫡流系図」を所持しており、これまで二神種家から数えて２０代続いています。３代目種直の時代、時の伊豫国守護であった河野通尭に誘われて１３６７年(正平22)河野氏の家臣団に入り、風早郡小川村宅並城に拠ってこの地域を本拠にし、次第に勢力を北方面に拡げながら、道後湯築城にも勤務していました。二神島を出てから種直－家直－家真－種－通範と５代に渡って伊豫本土で活躍しましたが、この間留守になった二神島の状況については明確ではありません。　関ヶ原の戦いを経て、藩政時代に移り通種－家種－種長と松山藩士として勤めます。種長の時、藩主加藤嘉明の会津転封に伴い二神島に戻り大庄屋としての身分を確保しながら明治維新までこの地域の政務・漁業を司ってきました。　この７００年間に近い歴史の中で二神氏が河野氏から受領した５０点近い、書状、安堵判物、覚書など中世の古文書類も保管され近世文書とともに現在神奈川大学日本常民研で解明が進められています。又、同系譜の墓地遺跡も発掘調査が行われており。近くその成果と内容が発表されることになっています。

本島二神氏の家紋はマルに横一と呼ばれています。本来海を生活の場とする氏族家紋は戦闘などの時、海上での識別をたやすくするためにシンプルな柄を用いたと云われます。芸予諸島の村上氏はマルに上の図柄でこの地方を支配していましたし、毛利氏もシンプルな図柄です。

土井二神氏

宗家二神氏の系譜の中で７代目通範に通種と種範の二子があり、二人とも秀吉の文禄、慶長の役に従軍しました。片山二神文書には従軍の内容が詳しく記録されていますが弟の種範は平壌に進攻し幼女を連れて帰国。柳原にあった二神城で養育し慶安３年６月に老死した。との記述もあります。この種範が風早二神氏の始まりとされ、その子に種昌、種秀、種成の三人がありました。この三人の内、長男の種昌は柳原で大庄屋の任につきますが、この系譜のことを土井二神氏と呼んでいます。そして、次男の種秀は松山藩士として召し抱えられ片山二神氏を、三男種成は常竹二神氏をそれぞれ名乗りました。

土井二神氏は藩政時代を通じて柳原の大庄屋を勤め代々牛之助の名前を世襲しました。本島二神氏とも交流があり本島二神氏１５代の種章の夫人は牛之助通晴の娘が嫁いでいます。松山藩役録には扶持米２０口を持つ郷士として記録がされています。土井二神氏の屋敷は回りを堀で巡らしており、その屋敷のことを人は二神城と呼んでいました。そして先に述べた文禄、慶長の役で平壌から連れ帰った朝鮮の幼女が後に亡くなり弔った墓地を高麗塚と呼び、最近まで存在していました。

土井二神氏は明治２７年１２月、９代目種成が亡くなってから没落をし、二神城も人の手に渡ってしまいました。しかし、柳原には当時の土井二神氏を偲ぶことの出来るいくらかの史跡が墓地も含めて残されています。

土井二神氏の家紋は丸に出一つ引きと呼ばれています。

連載　二神氏と苗字の歴史　第１回

事務局長　二神　英臣

二神系譜研究会では、準備会の時代からこれまでの間、二神姓を名乗る全ての方と、訪問、懇談、対話などを行う中で現在の二神氏の事情を調査してきました。

それらの中で出された「二神氏」に関する感動、思い、感想、疑問、意見などを検討するなかで、皆さんからのご質問として、今日では日本人の全ての人が、本人の意思と関わりなく当たり前のように毎日使っている苗字がなぜ出来たのか、と云うことについての歴史を教えて欲しいと云うことでした。

一般的な事柄も含めて今回から連載で二神氏と苗字の歴史について遡って行きたいと思います。

第１回は国民のすべてに苗字が付けられた明治新姓の頃の状況のついて考えてみたいと思います。

明治新姓の時代

江戸時代は、士農工商の身分制度が固定され、それぞれの身分に従って職業を世襲して他の職業に転じることを禁止されました。

徳川幕府が崩壊し、明治維新を迎え近代国家を建設するために政府は様々な施策を実施して行くことになりますが、そのためには、基礎として国民の実態を把握することから始めなければなりませんでした。そのためには戸籍制度の整備は避けて通れないものとなり、徴税、徴兵制度を推進して行くために「国民皆苗」を実施することになったわけです。

1870 年（明治３）９月４日、太政官から「自今平民苗字被差許事」の布告されました。これがいわゆる「壬申戸籍法」と呼ばれているものです。これまで徳川幕藩制度のもとでは人別帳等が社会的身分別に作られていたのに対し、新しい制度では、それぞれの住居に屋敷番号を付けて、属地主義によって編成しました。戸籍事務は大区・小区に分かれ、戸長が任命されました。1872 年（明治５）５月通称名・実名の併用の禁止、単名の採用を発令。たとえば二神牛之助通晴と云う言い方は認めず、二神牛之助か二神通晴かどちらかにして届けなければならなくなりました。８月には登録済の氏名の改姓は認めない「改姓改名の禁止」が出されました。1875 年（明治８）２月には、平民も必ず苗字を称し、不詳の者は新たに付けるよう布告しました。「苗字必称令」と呼

ばれているのがこれです。
太政官布告第二十二号
平民苗字被差許候旨明治三年九月布告候処自今必苗字相唱可申尤祖先以来苗字不分明向新苗字設候様可致此旨布告候事

　この省令によって苗字はこれまでの許可制から義務制になってゆきます。政府は 1870 年（明治３）の許可制で多くの庶民が次々と苗字を名乗ることを予期していましたが、徴税、徴兵がその主たる目的であることをそれとなく知った国民は届け出をしなかったため、再布告をしたわけです。
　この太政官布告の中で重要なことは、「先祖以来苗字不分明向…」とあり決して「苗字の無いものは…」と云っていませんつまり「お前達も元々苗字があったのだが徳川幕府が政策上名乗らせなかっただけである。従って祖先の苗字を探せ、探しても判らない者は仕方ないから新しい苗字を付けよ」と云っているのです。明治政府も大方の庶民がかつては苗字を持っていたことを知っていた上での太政官布告となったわけです。
　明治新姓令によって、これまで私称の者も無苗の者もすべて苗字を役場に登録したので 1857 年（明治８）をもって日本人はすべて苗字を持つようになりました。
　これが現在、約１４万と推定される数多くの苗字の原因となりました。幕末から明治の初めにかけての日本の人口は約三千万人と推定され、その中で苗字を名乗っていたのが三百五十万人程度の三万の苗字と云われ、明治新姓令以降４倍以上に苗字の数が拡大されたことになります。

　二神氏の場合には、幕末明治初年の頃にどの程度のお家が苗字の公称を許されていたのか、これまでのところ調査されていませんが、郷士、庄屋の任に当たっていた系譜では系図や古文書での確認が出来ています。
　室町、南北朝、織豊時代まで苗字を名乗っていた二神氏が徳川幕府の時代になって、二神氏を公称できる系譜と私称していた系譜とに別れたことは先に説明をした通りですが、これまでの調査では必ずしもその様になっていない事実もあります。
　北条市の客二神氏の系譜は江戸時代には農民としての身分で代々続いてきましたが、藩政時代の墓石には明確に二神と苗字を刻んでいて公称している実態が明らかになっています。
　次回はこの様な例外についてこれまでの研究調査をもとに報告いたします。

シリーズ　二神氏　人物伝

ＮＯ．１

事務局長　二神　英臣

二神 栗舎（本名種亮・土井二神氏８代目　1781～1864）

「栗舎の祖先は、秀吉の朝鮮出兵のとき功労のあった武士である。栗舎は、天明元年(1781)柳原に生まれ、丑の助と云いのち平策と改め種亮とも称した。代々柳原に住み、扶持米二十口をもつ郷士である。また、栗舎の他に禹港・柳陰舎・志澄などとも号した。若いとき生島足雄について国学を学び、万葉調の和歌を詠み絵も描いた。晩年には、塾を開き後輩を指導。幕末の風早俳壇の重鎮であるが、元治元年(1864)八十四歳で没した。句には次のようなものがある。

すゝしさは 心まかせの楽寝哉　　冬めく や手拭き白き人通り
春の雪重けに降る夕哉　　老楽の静けさ引く や夏の山

（『北条市誌』昭和 56 年 3 月 27 日発行より）

土井二神氏の系譜出身の二神種亮（栗舎）は『北条市誌』に掲載された「本市の人」の中でこのように紹介されています。　土井二神氏については「系譜紹介」の項を参照して頂くとし、ここでは二神種亮の生涯についてその業績を中心にしながら見てみました。

種亮は天明元年柳原に生まれました。土井二神氏は風早二神氏の祖と言われる二神種範の長子種昌の系譜のことで代々牛之助を襲名し、この地域の大庄屋を務めています。（『片山二神文書』）

しかしながら種亮（栗舎）の存在が土井二神系譜の中に現在までのところ確認されておりません。それがどのような理由なのか明確ではありませんが、種亮も牛之助を襲名しており、この時代の名前文化から見て土井二神氏の系譜の人物であることに間違いありません。彼が活躍した時代である幕末の頃の土井二神氏の古文書で、昨秋発見された「法善寺二神文書」あたりの解明が進むと又何かが判るかも知れません。また、種亮の子供が種成であること（『伊豫史談２』大正 13 年 12 月 30 日発行より）からしても種亮の系図上での存在の確認はそれ程困難なことではないと考えられます。

種亮（栗舎）が残した俳句、和歌の他、絵画でも知られています。その中に「山水図」「梅花図」（写真）の二点が現在のところ確認されています。「山水図」の上部には幕末の松山藩校「明教館」の教授、日下伯厳の筆になる詩が書かれています。このように土井二神氏の系譜のなかでも唯一の文化人として二神種亮（栗舎）の名前はその作品と共に今日の私たちに何かを語りかけているようです。

【土井二神氏】

通範　種範　種昌　種元　種正

通栄　通奥　通隅　種亮　種成

二神 種章（幼名清蔵 藤治 新四郎後改藤右衛門
本島二神氏１５代目１７３４～１７９４）

本島二神氏の種章は『豊田二神嫡流系図』を作成した人物として知られています。１７３４年(享保 19)頃に本島二神氏の１５代目（豊田二神嫡流系図では種家を初代としている)に生まれた二神種章は、 父種信の長男として若い時から「村用」などを務めるような形で庄屋職の見習いをし、２０歳代後半からは事実上、家や村の中心となりました。　種章が数多くの二神系図を作成した安永期は、種章は３０代の終わりから４０代の前半のいわゆる働き盛りの頃です。家や村の運営を中心になってやっていた時期が二神系図作りの時期と一致しているのには訳がありました。　　１７６８年(明和 5)松山藩が 交易のため二神島の属島であった由利島を召し上げる。と云う事件が起こります。種章は驚愕し、藩に出向き、由利島が二神島にとってどれ程大切な島であるかと云うことを記した願い書を提出し、必死で藩に抵抗しました。藩の役人は庄屋の種章に圧力や脅しを掛けますが決死の覚悟でその主張を通し、結果的には由利島の支配権を守りました。その時、種章が藩を説得するために作成した多くの資料　の中の一つがこの『豊田二神嫡流系図』であり、二神氏がどれだけの歴史を背景にこの島に存在をしているかを証明したものと言えます。

種章の時代の出来事にはもう一つあります。それは１６０１年(慶長 6) ９月、 鹿島城主であった来島康親が関ヶ原の合戦で西軍に加担した廉により，豊後国玖珠郡森へ転封となりますが、これに同行した片山二神氏の分流と考えられる二神慶用、二神利三に繋がる子孫が豊後森久留島藩で続いていました。 １７７６年(安永 6) ４月、豊後森久留島藩の家臣になっていた二神国次、新三郎の親子が二神島を訪ねてきました。そして種章と面会をして「私達も二神通範の末孫であなたと同じ先祖を持っています」と話し、同族の確認をしています。これ以降豊後森二神氏と本島二神氏との交流は続けられ、 １８２２年(文政 5)にも豊後森の二神種村が二神島を訪ねて来ています。

このような業績と、足跡を残した種章は、戦国時代の二神氏の歴史に残る二神通範と対比される人物として記録されていますが、種章の五男で河東家へ養子入りした末彌がいます。その曾孫に、新傾向俳句を唱えて全国を行脚し、後に山頭火にも影響を与えたと云われる河東壁梧桐がいます。

後の世にこうした文化人を生み出した本島二神氏の系譜は､昨年逝去された故二神司朗(種章)名誉会長の絵画の才能へと引き継がれました。

種章は，１７９４年(寛政 6) ８月２９日６１歳で無くなりました。

種章辞世の句　　**残暑や　夜道に越えん　死出の山**

（この稿は神奈川大学日本常民研の関口博巨先生の講演記録を参考にしました）

【本島二神氏】

通範 ― 通種 ― 家種 ― 種長 ― 種忠 ― 種次

種永 ― 種信 ― 種章 ― 種福 ― 種五 ― 種式

種美 ― 司朗

豊田種長追善供養祭と館の椿

会長　　二神　浩三

椿の咲き誇る４月１５日、山口県豊浦郡豊田町一ノ瀬地区の豊田種長追善供養板碑の前で神式による種長の６４５年祭執り行われました。

二神の祖、豊田氏の菩提を弔う一ノ瀬地区ならびに豊田町の皆様に感謝の意を表して当会から１７名の会員が参列し、町を挙げての歓待に大きな感動を覚えたところです。

供養祭のあと、豊田氏の史跡を見て回り、オビー屋敷跡に根を張り、枝を広げ、多色の花に彩られた「館の椿」にも巡り会うことが出来ました。これらの追善供養祭や館の椿の由来について、一ノ瀬地区の豊田氏保存会会長礒部完治氏の一文を以下に記します。

豊田種長追善供養板碑

４ 月1 ５ 日の追善供養祭

豊田種長追善供養祭の由来

一ノ瀬区長　礒部完治氏　現在は豊田氏保存会会長

山口県豊浦郡豊田町一ノ瀬地区で行っている五年祭（豊田種長追善供養祭)と云う行事の由来についてお話ししたいと思います。

一ノ瀬に薬師堂があり、そこに豊田氏一族のお墓があります。その周囲は明治の末期まで、全く荒廃したまま雑草が生い茂り、土手は崩れ、しかも石碑の前には、旧藩時代の名残のモミ囲いの土蔵があり、そのため日照も悪く、辺り一面鬱蒼としていました。

そのころ、部落に悪疫が流行り、不幸が相次いで起こり、お年寄りが人生を全うして逝くのは自然の姿ですが、若い人や子供が亡くなっていく、これはどうしたことかと部落で話し合いをしたとき、易見に見てもらってはどうかと云うことになり、早速見てもらったところ、「あなたの所には偉いお方の墓があり、ほったらかしにしてある。勿論法事供養もしていないと・・・」そのことを部落に帰り話したところ、それは殿様のお墓であろう。豊田氏程の豪族の墓地が余りにも荒れ果てているのは良くないので、この際、整地、清掃し、供養してはと話が決まり、土蔵を取り除き、現在のような石垣、玉垣を作り、面目を一新し、墓地修繕を完了し大祭典を行った。　時に明治４４年５月１２日、伊賀守５６０年祭りに当たる時でした。その時に話し合って、以後五年毎に神、仏交互に追善供養を行うことになりました。

第２回は大正５年４月１２日で５６５年祭でした。この時は、地区の名士を呼び、青年会の色々な催し物があり、餅撒き、福引き、筑前琵琶、芝居等、７時３０分から夜１２時まで盛大に行ったと言い伝えられています。

私の感想ですが、豊田氏は約３００年間豊浦郡を支配しておられた豪族であったが、５６０年間供養することなく月日が流れ、明治の末期頃、殿様（豊田大領様）の霊が易見の口を通して云われたと思います。それで一ノ瀬部落は、約束事として５年毎に追善供養をしております。本年（２０００年）は１８回目の６４５年祭になります。

館の椿の由来

広畠と云う所に豊田の館跡があり､オビー屋敷と云う地名がある。（オビィとは豊田地方の方言で尼さんのこと）　そこに椿が植えてあります。樹齢６００年、高さ１０ｍ、幹周１６５㎝、枝張１１ｍ四方、昭和３７年５月に豊田町の天然記念樹となりました。

花は八重咲きで、色は５色、花柄は１０種類出ます。絞り、赤、ピンク、紫の無地、半ぞめ（白・赤）、特に白色は羽二重色で実に清楚です。

この椿は京都から持ってこられ豊田一族の遺愛の椿だから、誰として切り得なかったのだろう。気高い椿と云う言葉もそういう所から出たのだと思います。

根元に空洞がありますが、平成８年、樹木医に診てもらい、手当を行いました（空洞充填法）。今も隆々と栄えております。６００年続いている生き証人です。その椿を挿し木しました。それはどう云う事かと云うと二つの理由があります。

一つは天災地変、また病害虫等で枯れた場合のことを思い

二つは二神島へ行きたい、何時かは行かれるとの思い。

平成２年４月９日に挿し木をし８年経っています。

分身として持って参りました。どうか菩提寺に植えて下さい。名前は「館の椿」と付けて下さい。そうしたらルーツは山口県豊田町一ノ瀬です。

平成１１年（１９９９）３月２１～２２日、一ノ瀬から地区の区長　磯部完治氏他１６名の方々が、二神島および中島へ二神氏の墓参りに来られたとき、椿の苗木５本を持参され、寄贈を受けた。これらの椿は、二神島の安養寺、中島長師の真福寺、北条市の法善寺、片山二神墓地、城辺の諏訪公園にそれぞれ植樹し、館の椿の板碑を建てた。

板碑の記述

「館の椿」

　山口県豊浦郡豊田町広畠に二神氏の先祖豊田氏の館跡があり、オビー屋敷と呼ばれています。そこに樹齢約６００年の大椿が枝を広げ、豊田町の天然記念樹に指定されています。この椿は、昔豊田氏が京都から持ち帰ったとされる豊田一族の遺愛の椿です。
　豊田町一ノ瀬地区の方々は豊田の子孫の地二神島を訪ね墓参をしたいと云う一念から、この椿の苗木を育て、１９９９年３月２２日に区長礒部完治氏他１６名の一行が二神島および中島に来島された時、豊田氏の分身として５本の椿苗を持参・寄贈を受けました。二神氏ゆかりの場所として、二神島の安養寺、中島長師の真福寺、北条市の法善寺、北条市片山の二神墓地、城辺町の諏訪公園に植樹し、「館の椿」と名付けました。

１９９９年３月　　二神系譜研究会

城辺町常磐公園

北条市法善寺

「 七 大 夫 」

常任理事　　二神　重則

岸和田は大阪の南部にあり、近世は岡部氏の城下として、近代は紡績産業により発展した。現在この地を有名にしているのは沖にある関西空港よりも、あのＦ１モナコグランプリに匹敵するコーナリングの、走るダンジリなのではないでしょうか。

さて中世も終わりに近い、１５８２年（天正１０）に本能寺で織田信長が憤死し、秀吉は１５８３年に柴田勝家を北近江に破り、着々と地歩を固めていた。ここ大阪の地に勢力を誇っていた、本願寺一向門徒の石山本願寺は今はなく、同じ場所に大坂城の築城が始まった。秀吉は中村一氏を岸和田城に派遣して泉州の地検をおこない、岸和田城の兵糧米として泉州の寺社領をすべて没収した。この事はこの地域を経済的な地盤としていた、根来寺や雑賀衆にとって譲ることの出来ない事態であった。そこで根来・雑賀衆は岸和田の近木川流域に沢・積善寺・千石堀などの出城を築き抵抗した。

その地に七大夫が立っていたのは１５８４年。

正月１日、ついに雑賀(鈴木)孫一のもと２千とも３千とも言われる鉄砲が岸和田城に向かって火を噴いた。春３月、海上と陸上より雑賀衆は進撃するもついに敗れる。そのころ雑賀衆と連携を取ったと言われている徳川家康は、愛知県の小牧山に陣を張りやがて秀吉と４月の長久手の戦いとなる。

残念ながら、七大夫がどちらの側に付いていたかは資料の中に見られない。その時、七大夫は１６才。

七大夫、大坂の陣に戦う。

４８才になった七大夫はこの戦いで、軍労の証文をもらっている。しかし豊臣方か敵方の家康に付いたのか、冬の陣か夏の陣か明らかでない。あの天下の名城が崩れ落ちる様を見たのかも知れない。

七大夫がつぎに現れるのは福岡黒田領の資料の中である。

１６３６年の有馬領の政策は過酷を極め、ついに天草四郎時貞(益田)を盟主に一大農民一揆となる。一揆は瞬く間に島原半島に拡大したが、１６３７年１月、幕府は松平信綱を派遣して九州の全大名を動員した。そして２月２８・２９日の総攻撃の日を迎える。その日七大夫は息子九大夫と共に忠之の家人として働いている。

黒田家譜のなかから、その時の様子を見てみよう。

「二神七大夫は九大夫と出かけるが、築山より南にて櫛橋六右衛門と同所

にて戦う。賊数多く来たりしを両人すすんで槍を以てせりあいける。七大夫は七十才に及ぶ老巧の士にて、殊に身も健やかなりしかは、勇み進んで数多くの敵に渡り合いさんざんに戦う。六右衛門に向かって、夜の槍はあかるものなり。其意得有べしと、再度詞をかけたり。六右衛門意得たりとて膝を地につきて槍を突きだし、忽敵一人突きふせ、やがて其首をとりける。其後も両人激しく戦いけるが、七大夫は討死しけり。」

福岡の香正寺に塔が有るとか。

七大夫は自由と、活躍の場のあった中世末期に生まれ、将来の息苦しさを感じさせる近世の門口で去っていった。海の子として幸せな一生だったのかも知れない。

参考資料。

１）福岡藩分限帖集成

小林四郎左衛門組御馬廻　　弐百石　　二神九大夫

２）黒田家譜

３）大分市内林四郎氏所蔵二神文書および二神系図について

竹野孝一郎氏

４）片山二神系図

系図では「七太夫」となっていますが、黒田家譜や福岡藩分限帖に表記されている「七大夫」にしました。

二神系図・得能系図・片山二神系図を別紙に表示しています。系譜研究会でもその中心に据え、多くの人が知っている「通範」を中心に編集しました。３家に伝わる系図がこの様に違っているのも、大変興味深いことです。

今回この七大夫を追っかけするきっかけは、系図の中に父親の「二神瑞庵」と言う名前を見つけた事でした。そしてそれぞれの系図に共通するキーワードは「岸和田合戦」「大坂籠城」「島原の乱」「黒田」などで、これらにより大分県県立図書館に在った黒田家譜の中の「二神七大夫」の記述を見つけました。大分の図書館の方の対応や、ハコも中身も特に郷土の資料を置いているスペースには驚きました。

また、東京の佐々木さんからは「福岡藩分限帖集成」のコピーを送ってもらいました。佐々木さんは「双水流」柔術の開祖「二神半之丞」を調べておられます。半之丞は玖珠森より豊後竹田に移った二神氏の中に居られるのではないかと予想をしていますが、現在探す手掛かりがありません。何かご存じの方が居られましたら連絡を下さい。

豊後竹田には、玖珠森の久留島氏に仕えていた二神氏が移っていったと伝えられている、また福岡には七大夫の塔があると書かれています、福岡の図書館には二神氏の資料があるかも知れません。九州へ行ってみたい。

二神系図

通範 三郎 隼人佐 此二字自 後善応寺殿給

種尉 官兵衛 甚右衛門

種房 伍兵衛尉 有軍労

種春 助左衛門

種家 四郎兵衛尉

種良 修理進 法名瑞庵 久留嶋雲州公感 大友義統状有之

時成 吉兵衛 七太夫 大坂籠城 軍労証 肥前於 筑前福

嘉林 九郎右衛

得能系図

片山二神系図

種元 監物 仕久留嶋侯及

種 九郎五郎 慶長六年九月六日於手及道後討死和河勝元盛状後全方種元 藤左衛門尉法名道覚

種弘 新八 仕加藤左 典厩後号 二神瑞庵

種久 久兵衛尉

通乾 三郎 隼人助 後善応寺殿統二字

種重 長次郎 後改七太夫泉及岸和田合戦 有武功采地八百石仕黒田右金 吾寛永年中於嶋原討死年

種國

役員のつぶやき ☆ ☆ ☆

「二神島と私」

理事　　二神　康郎

二神島と私の機縁は昭和 47 年(1972)にできた。松山市の三津浜で信用金庫を経営していた父親が逝去したので忌引休暇をとって帰省した私は、葬儀が終わった後、父親が日頃一度行ってみたいと言っていた夢を果たそうと、家に代々伝わる系図を携え二神島を訪れた。

島に着いて予め電話しておいた二神司郎先生のお宅に伺い、私が持参した系図と先生のハンディタイプの系図を突合わせた結果、私の祖先は約２００年前に先生の先祖から分家して豊田姓を名乗り、約１００年前にさらに分家して島から出て二神姓に改め松山市の港山町に定着した事がわかった。私は当人から数えて５代目にあたる。

これを機会に家族共々夏休みには二神島を訪れ命の洗濯をするようになった。それがきっかけで昭和５５年(1980)の春、当時千葉県(現在広島県)に住んでいた二神種昭氏が電話をかけてきた。彼と相談し東京２３区の３３人の二神さんに往復葉書を出し、先祖に付いての資料を差上げるゆえ３月２３日午後１時に東京駅八重洲口の銀の鈴に参集願いたいと連絡した。当日二人で二神と書いた大きな紙を銀の鈴の下に広げて待っていると、兄弟、子供連れで２０人ほどの二神さんが集まってきた。

早速近くの喫茶店に一行を案内し、簡単な説明ののち先祖の資料のコピーを配布した。いわく『中島町史』、『豊田町

史』、『日本神語と藤原氏』、『鹿島神宮』の4部である。これは大変喜ばれ1万円を置いていかれた人もあった。そこで各二神さんに自己紹介してもらったが、弁護士あり、魚屋さんあり、医者あり、個人タクシーの運転手ありで職業はさまざまであったが、いずれのかたも先祖をたどると四国であった。

昭和59年(1984)ふとした機縁で朝日新聞社『朝日旅の百科』瀬戸内海編に二神島の紹介文を寄稿した。拙稿にプロの写真家(槙野尚一氏)がわざわざ二神島に出張し由利島を含め島のあちこちの写真を撮ってページを飾ってくださった。掲載写真は18枚であったが、二神島を紹介した『ナショナル・ジオグラフィック』のカメラマンは3万枚の写真を島で撮ったということなので槙野さんも膨大な量の写真を撮ったに違いない。

今年5月(株)商業界から『欧州小売業の世界戦略』を上梓した。この本が売れれば『二神』の名も売れることになるのだが・・・・・・

種範絵図と康郎氏

役員のつぶやき ☆ ☆ ☆

「宗閑殿と私」

常任理事　　二神　興三郎

それはそれは不思議な出会いでございました。私は、昭和５５年１月に入籍し「二神」となり大阪は岬町淡輪に住んでいました。

昭和５７年の秋のこと、夜明け前くらいでしたでしょうか。夢枕に立つと云うのか、先代横綱の朝潮太郎の顔を少し小さくしたような感じでした。着物は濃い茶に白い縦縞の入った羽織で着流しという感じでしたが、表情はあまりなく、私の枕元に立っていました。刀は持っていませんでした。何か云いたい様子でしたが、私も声が出ません。

その時、蚊の鳴くような小さい声で二言「寂しい、寂しい」という聞き取れないような声でした。私は、身体を動かして声を出そうとしましたが声にならず、次の瞬間姿は消えていました。

それから夜明けまで、「誰なのか、目的は？」と考えていましたが、見当もつかず、「松山へ一日も早く帰ってこい」との命令ではないかと思い至りました。

昭和５８年６月の松山営業所に空席が出来て転勤を申請し松山に帰ってきました。しかし、夢枕に立った人が誰なのか見当もつかず時間ばかり過ぎていきました。

ところが、昨年の３月、二神系譜研究会に出席して福川先生(法政大学)のお話を聞いていた時に、通範の子に法名宗閑とありました。ピーンときて家に帰り土居二神の過去帳を見て驚き、何と土居二神の初代の牛之助の父親が宗閑殿であり「長慶院宗閑」と明記されていました。

このことを英臣さんに連絡しますと、同時期に法善寺(北条市)の村口住職さんも自作のデータベース上において判明し、北条にて全員で喜んだと云われ、何か不思議で偶然にしても出来すぎのように思えました。

宗閑の墓も「北条市ふるさと館」の竹田館長さんの努力により確認されましたが、その墓が昭和５８年と平成１１年１０月２日の宗閑３５０回忌の直前の９月２３日に倒れ、９月３０日に修復した次第です。何か宗閑殿は自身の墓を倒すことで意思表示をしているかのようで…。

いまでは、私の夢枕に立った人物は宗閑殿こと、「二神新八（幼名）・彦左衛門尉藤原種範」その人に間違いないと思っています。

今一度、枕元に立ってもらってビールでも一緒にのみながら、虎退治の話でも聞きたいものと思っています。

北条市片山墓地の宗閑殿の墓

法善寺にて、筆者二神興三郎氏(左端)

役員のつぶやき ☆ ☆ ☆

「系譜研究会との出会い」

常任理事　　二神　博文

私が、二神系譜研究会を知るきっかけとなったのは、北条市在住の父親からの情報でした。「二神氏の系譜を随分熱心に研究している会があるらしい。」とのことでした。まだ、準備会発足以前でした。

私は、（現在 39 歳）子供の頃から祖父母が、ご先祖様に手を合わせる姿を見てきた環境で育っており、ただ、漠然と私のルーツをたどればどうなっているんだろう？と思ったりはしていました。それとは別に以前自己啓発に関心を持った頃、成功者の講演やセミナーを受講したことがあります。そのお話のなかで、お墓参りをしたほうがいいとか、ご先祖の供養の大切さをお話されていました。これは、たまたま一人の方のみのことではなく、私の経験上何人もの方が同じようなことをおっしゃっていました。

そんなことを思い出し、入会して系譜を明らかにすることがご先祖の供養になるかも？と思いながら何となく出席するようになったのがきっかけです。そこでは、皆さん初対面なのに何となく親近感があったのは私だけではないのではないでしょうか。

私の系譜については中西二神氏ですが、現在の実家、北条市中西外に居住する以前についてはあまり解っていません。北条市の二神氏は幾筋もの流れに分かれているせいもあり、解明にはまだまだ時間がかかりそうです。

ところで、二神氏は二神島を拠点とした海の領主でしたが、全く個人的なことになりますが、私はマリンスポーツが大好きで過去にはウインドサーフィンで全日本でのトップクラス入りを目指したこともありました。今は趣味でヨットに乗っていますが、「海民スピリッツ」の精神を引き継いでいるのかな？なんて勝手に考えたりしています。

我が家のニュースとしては、5 月に長男が誕生しました。これから我が二神家にも次世代へと新たな歴史が刻まれていくことでしょう。

今年 3 月 12 日総会後、事務局長の二神英臣氏より「常任理事をお願いします」との依頼があり、私には荷が重いと思いお断りしようとしましたが熱心な説得でお受けするようになりました。歴史的な背景や系譜等等についてもまだまだ勉強不足で不安がありますが、少しでも皆さんのお手伝いが出来ればと思っています。

これから皆さんと一緒に勉強しながら一歩ずつ進んでいこうと思いますのでよろしくお願いいたします。

役員のつぶやき ☆ ☆ ☆

「二神さんて、何人いるの？」

常任理事　　二神　重則

全国に二神さんは、何人居るのでしょう？
そんなことを考えたことはありませんか？

５年前、ホームページを作っているときに、ふとそう思いました。また、二神さんが全国にどの様に分布をしているのかも知りたいと思いました。その様な折りには電話帳ですね、有力な手掛かりです。様々な系譜会の方々が必ず通る道です。ところで現代は、全国電話帳のＣＤ－ＲＯＭや「エンジェル・ネット」と云う武器でそれを調査します。

「二神」さんを個人の電話を調べましたところ、全国で９４０軒ありました。県別の分布は以下の通りです。

この９４０軒から、総数の推計を始めました。
世はＩＴ革命の時代。
インターネットを利用して全国の個人加入電話の総数を調べましたところ、４２２４万件と出ていました。

電話総数と１億２千５百万人の比率で行けば、電話１台あたりの人数が出て、これでもう推計が出来たも同然だと思っていましたが、

ところが･･････
そう言えば･････、会員さんからも「電話番号簿に出していません。」とのメールや電話があった。
えっ、待てよ･･････。このままでは、推計できない　！！！
いったい、どの程度番号表示をしていない人がいるのだろうか？

神や仏を信じない私は、こんな時だけ勝手な神頼みという訳にも行かず、困っていましたところ。「表示拒否者は日経に出とるよ。」と、メールが来ました。やはり持つべき者は友ですね。
いよいよ計算です。

二神さん、総数の推計。

日本の人口　　１２５００万人
電話総数(個人加入)　　４２２４万件
１件あたりの人数　　２．９６人

二神さんの個人加入電話総数　　９４０件
表示拒否者のウエイト　　約３０％
二神さんの個人加入電話総数(表示拒否者を加算後)
１３４０件
二神さんの総数推計
(電話１件あたりの人数　＊　電話総数)
１．９６　＊　１３４０　＝　３９６６名

約　４０００名

これからは携帯電話が増えるでしょうし、表示拒否者も多くなるでしょう、こちらの面からも我々が系譜調査最後の世代ではないかとの感が強くします。

もっと確かな推計の方法をご存じなら教えてください。

第１回二神島交流会記念講演

１９９９年５月３０日　二神集会所

関口博巨氏　神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員

●はじめに

関口と申します。本来なら私がここでお話をする前に、所長の橘川がごあいさつをするところだったんですが、何かトラブルがあったのでしょうか。飛行機のチケットはとっていたのですが、まだ到着しておりません。到着した時点でごあいさつをということになろうかと思います。

私は名前を「関口ひろお」と読みます。私の専門としているのは江戸時代、日本の近世史という時代なんですけども、まあ大体江戸時代と考えていただけたらと思います。その頃の庶民のことについて調べています。

今日は、神奈川大学の日本常民文化研究所というところで、二神島の二神司朗先生、この準備会の名誉会長でもありますが、そのお宅の古文書をこの研究所で調査させていただいたということがありまして、その文書の整理に関わっていたということもございまして、私がお話をするということになりました。

このような会にお招きいただいて、それも第１回ということで大変光栄であると共に、これだけ多くの二神さんたちに

囲まれているというのは多少不安もあります。その恐さのあまり寝付けなかったものですから、話もうまくいくかどうか不安もあります。今日は、どんなお話をしようかと考えました。このプログラムの中に今日のお話しの資料が入っています。これで見ますと１２ページから１９ページです。

タイトルが「常民文化研究所と二神司朗家文書」。副題に「整理の経過と二神氏系図のこと」とあります。（「整理の経過」というのは間違いで、「調査の結果」ということですので、お詫びして訂正いたします。）。このタイトルでお話しするというのは常民文化研究所と二神司朗家との関係の歴史、二神司朗家に所蔵されていた文書を現在整理中なんですけどその経過について、そしてその整理の過程で、特に系図のことに関して、私なりに考えついたことをお話ししたいと思います。

●常民文化研究所と二神家・二神島との関わり

まず、神奈川大学の日本常民文化研究所と二神家あるいは二神島との関わりですが、これについては資料の１３ページと１４ページにあります。このことをお話しすることが、なぜいま常民文化研究所の特別研究員である私がここにいるのかという説明になろうかと思います。特に私自身は、二神島、二神家、それどころか瀬戸内海の歴史の研究者でもありません。また、系図の研究者でもありません。どちらかといえば石川県の能登半島とか山梨県の江戸時代のことを勉強している者なんですが。ただ、常民文化研究所と関わりをもっていたことで二神家とも関わりを持つという不思議なご縁でここにいるわけです。

そもそも、二神家あるいは二神島と常民文化研究所が関わりを持ったのは、昭和２５年月島分室調査員宮本常一氏が「二神家と二神漁業協同組合の調査」からとあります。正確にこの時と言えるかどうかわかりませんが、この頃に初めて関係を持つことになりました。この月島分室というのは常民文化研究所の一分室になるわけです。そもそも「常民文化研究所とはいったいなんだろう」。この場にいらっしゃる多くの方が常民文化研究所とは聞き慣れない研究所だろうと思います。

これは皆さんご承知だと思いますが、明治・大正期の実業家渋沢栄一という方がいらっしゃいます。その渋沢栄一さんのお孫さんで、戦前戦後で日本銀行の総裁をされたり、大蔵大臣をされたりした渋沢敬三さんという方が、大正１０年（１

９２１）に自宅の物置にアチックミュージアムソサイエティを開設しているんです。これが後に日本常民文化研究所と改称して、日本列島の民衆の生活・文化・歴史というものを調査研究する機関に発展していったものなんです。

この常民文化研究所に対して昭和２４年（１９４９）に水産庁が、水産資料の整理収集の委託を行ないました。その委託事業が東京の月島の東海区水産試験場という水産庁の管轄の研究所の一室に置かれたんです。それが常民文化研究所の月島分室です。その月島分室には宇野周平さんという人を中心として、多くの若手の研究者たちが研究員として集まっています。その中のお一人が、先程からお話しで出てきております網野善彦先生で、調査員という形で関わっていたのが宮本常一さんということになります。宮本さんは山口県の周防大島のご出身であり、その関係でこの二神島に関心を抱かれたのだろうと思います。それで調査に入りました。

網野善彦先生

二神史朗先生

昭和２９年（１９５４）８月に、常民文化研究所の評議員伊豆川浅吉さんというところへ水産庁から「共同漁業権への依存度に関する調査」という研究が委託されました。その時に研究員の河岡武春さんが宮本先生に傾倒していたんですね。それでどうも二神島を調査地として選んだらしいんですね。そしてそこで、網野善彦先生が同行して二神司朗家にお邪魔しているということになります。その当時は、司朗先生の弟さんの道夫さんが家を守られていた時代です。そこで中世文書巻き物にして四巻、それから近世・近代文書を借用して帰京後、網野先生らが中心になって整理しておりました。

ところがその後、１９５４年度分で水産庁からの委託予算が打ち切られてしまいます。そのために月島分室が事実上解体状態に陥りまして、網野先生たちも研究所を離れることになりました。そうこうしているうちに、中島町のほうでも中島町誌の刊行計画が起こってきたために、二神文書が常民文化研究所のほうに貸しっぱなしになると困るということで１９６２年から６３年ころ（これは網野先生の記憶によるわけですが)に島のほうに帰っているということになっています。ところが、これが常民文化研究所に関わっていた人、それから常民文化研究所の歴史と、この二神家文書というのは密接に関わっているんですが、その間常民文化研究所は水産庁の委託予算を打ち切られるとかさまざまな出来事があって、神奈川大学のほうに移管するということが起こってくるんです。それが１９７９年から１９８１年ころにかけての出来事なんです。その神奈川大学に現在常民文化研究所があるんですが、常民文化研究所が入ってくる過程で名古屋大学に当時いた網野善彦先生は、神奈川大学のほうに移っておいでになります。

●新たなる二神家・二神島との関わり、そして神奈川大学へ

その時にもう故人となられていた月島分室の中心人物であった宇野周平さんが、かつて保管されていた文書の中にどういうわけか二神文書の一部を発見しました。本来であれば、中島町誌の編纂の時に二神文書は返却されていたはずなんです。一部分が残っちゃったんです。その残っていた一部を神奈川大学日本常民文化研究所としてお返しにあがるという、それが神奈川大学日本常民文化研究所と二神司朗家および二神島との新たな関わりの始まりです。これは１３ページの最後のほうになりますけど、１９８２年ですね。網野先生と当時常民文化研究所の企画をされていて現在所員の田島佳也さんが二神島を訪れます。そしてこの時、１９８２年１１月２４日のところを見ていただきたいのですが、二神司朗先生からその古文書の寄託を民宿西野において申し出を受けます。それによってその文書をこの時、神奈川大学のほうに運ぶということになっております。

そしてそのあと「二神島の民家や集落などの調査」が行なわれています。二神家、二神島に関して神奈川大学の大きな出来事は、１９９４年、１４ページですが、平成６年にいたって、ご自身も二神島出身の当時、牛淵ミュージアムの館長だった中田和邦さんを通して二神司朗先生から、すでに寄託

してあった古文書の神奈川大学への譲渡へのお申し出がありました。そしてその譲渡を神奈川大学で受け入れて、その協議の過程で網野先生が二神島と二神家の総合的研究をしますということで司朗先生にお約束をしたんです。その結果、私はこの島に初めてお邪魔したということになります。これが、二神島総合調査で１９９５年７月３１日から８月４日の間です。

総勢３０人を超えるもので、文書班は二神司朗家の古文書、安養寺の大般若経など、建築班は建築史の西先生をはじめとするグループが１９８５年に調査しておりました、民家と集落の調査をさらに行ないました。新しいところでは考古学班として鶴見大学の大三輪、河野先生が中心となって由利島（パンフレットの４ページに説明）の調査を行ないました。この時の報告に関しましては、１９９６年９月発行「歴史と民俗１３号」に納められています。この時に、二神司朗家で新しい古文書として、これを第二次再訪文書と言っていますが、この概要調査をしてこれも神奈川大学のほうにお預かりをするということになったわけです。

二神島

その後１９９６年以降も考古学班の方を中心にして、二神家墓地の調査を何度か行なっております。１９９９年神奈川大学の共同研究奨励助成金というのができまして、その助成金を基礎として何とか二神家墓地の本格的な調査ができないだろうかと現在検討しているところです。非常におおまかで分かりづらい説明になったかと思いますが、このような経過で常民文化研究所が二神島および二神家に関わりを持ってきたという、５０年近い関わりになるわけです。

●目録づくり作業進展中

そして持ってきた二神家文書を神奈川大学のほうに譲渡という形でお預かりしているわけですが、それに関しては非常に膨大な古文書です。その膨大な資料を歴史の史料として活用するためには、その中にどんなものがあるか１つ１つはっきりさせていかなければいけないわけです。古い紙の山がごそっとあったら見る人によってはただのゴミにしか見えないわけです。そのままとしては歴史の史料としては使えないわけですから、１つ１つにどんなことが書かれているのか、年代とか、表題とか、書いた人とか、受け取った人などを目録に採って、目録を集めて１冊の目録集にしようと、非常に細かい目録づくりを現在やっております。

どんなことをやっているのかということで、先ほどの年表の１３ページの１９５４年に初めて網野・河岡両研究員が二神家を訪れた時にやはり古文書を借用しております。実際このときにその古文書整理しております。これは「第一次近世近代文書」と称しているものです。ただ、この時代の整理の仕方というのは非常に大雑把なものだったんですね。ですから一応整理されている第一次文書と新たに発見された第二次文書と言っている古文書を含めて１９９５年の総合調査以来、現在の学会の古文書整理の水準で統一的な目録集づくりに取り組んでいます。そして第二次文書に関しては、現状記録方式という調査の方法をとっております。

●現状記録の大切さと見えてくるもの

１５ページをご覧ください。ちょっと写真が黒くてわかりづらいと思います。これは現状記録をどんなカードや道具を使って行なったのかということを示すために入れたものです。現状記録というのは、古文書がどういうふうに置かれていたのか、その現状を記録していくということなんです。まず、皆さんのご自宅にあります書類のこととかを想像してみてください。お宅に物がいろいろあると思います。でもそれはどこか同じ部屋に置かれているとは限りません。それは皆さんが考えてそれぞれの部屋に置いていますね。そして時にはそれを整理し、時には乱雑に置いています。古文書というのはそれと同じようなものでして、蔵に置いている場合もあれば母屋の場合もあります。素直に何もいじらなければ古い順にどんどん積み上げていきます。こうやって蓄積された古文書は何かを語っているかもしれないんですね。

例えば、これとこれはここにあったとします。するとその

家の歴史の１コマにいた人は、誰かがここにこうして置いたんです。そうやって置いたこと自体が歴史の史料になるだろう。そういう考え方から、古文書がどこにあったのか、どの箱にどうやって入っていたのかということを１つずつ丁寧に記録してその記録が済んだところで改めて封筒やカードを使って古文書の内容をとっていく細かい作業をしています。

　このスケッチの７番のところで、二神島の仲間がこの箱を買い求めたと書いてあるんです。そうするとこれは明和９年（１９７２）に二神村でこの箱を買って二神村の公的な資料を入れておいたんだということが推測されます。そして、実際に入っていた古文書を見てみますと村の行政関係の書類がかなり入ってます。江戸時代から明治時代まで入っています。箱の下のほうには、先程まさに「海民スピリッツ」ということばが出ていましたが、海を舞台に暮らす村らしく公的な船関係や年貢関係の書類が出てきました。ところが、だんだん上のほうを見てみると、明治時代の土地関係の書類が入っているということが分かるんです。つまり、この箱の中だけで二神島のそれなりの歴史が語られているわけです。ただ、おもしろいのは下のほうにあった江戸時代の史料で船関係、漁業関係の史料も入っているんですが、上のほうにいくと土地関係ばかりで漁業関係のが入っていない、つまり明治・大正期の史料はここには入っていないですね。ということは、今までは村で漁業などは管理していたんだけども、明治時代以降になると漁業協同組合ができて漁業関係、船関係の史料はそちらにあるというようなことがわかってくるんです。

二神島　上灘より遠望

●史料の整理状況の現状

そういう具合に現状記録によって、単に文字からだけでは分からない歴史情報を残していこうというやり方で行なっています。こうやって時間と手間をかけて、調査をしているにもかかわらず現段階ではまだその整理が完全に済んでいない状況で、結果的に二神司朗先生とこちらにお集まりの二神会の皆さん、二神島、さらには中島町や愛媛県の地元の皆さんには大変ご迷惑をおかけしているという状況になっています。それでも少ない人出を駆使して少しずつ整理を続けた結果、現在第一次文書に関しては、点検を残すのみになっています。第二次文書もすでに半分以上の整理がおわっています。そして現在までに判明しているこの文書群の性格は、第一次文書と称するものは３５０点以上４００点弱になるでしょう。そしてその大部分は近世の文書。江戸時代の文書が中心です。その二神司朗家のご先祖様が二神村の庄屋をやっていた関係から、二神村の行政文書がもっとも多くなっています。それに家関係の古文書が混ざっています。その家関係の中には系図類も入っています。

そして第二次文書ですが、これはまだ整理が完了していないので総点数は確認できないんですが、段ボール箱で約２０箱。これは封筒に入れたりして整理していますから、状況によってはもっと増えたり減ったりするので何とも言えないです。おそらく１０００点を超えると考えられます。ただ、ほとんどが明治時代以降のものです。第一次文書は近世文書。第二次文書は近代文書ということになります。この第二次文書ですけど、二神司朗さんのお父さんや伯父さんになる団四郎さんとか仲次郎さんが、神和村村長さんとか議員さんとか漁協の理事とかされていた関係で公的な書類がほとんどであろうと思われます。それに若干の近世文書と古い書籍が混ざっています。史料の性格としてはそういうふうになります。

大急ぎで常民研究所二神家、二神島の関わり、それから史料の整理の状況についてお話ししてきました。大変急いでしまって分かりづらいと思いますが、その分残った時間で、こちらの準備会の目的である系譜の問題について、私なりの見方をお話ししておきたいと思います。

●安永年間（１７７２～１７８１）のこと

二神氏の系譜のことを考える場合に、江戸時代の安永年間（１７７２～１７８１）のことで気が付きました。幕政の関係でいうと江戸時代も折り返し点を過ぎて、徳川９代将軍、

１０代将軍、家茂、家治の時代ですね。側用人から老中として幕政の実権を握った田沼意次の時代です。その時代は二神家の系図を考える時に、実は重要な時期じゃないかと印象としてそう思いました。準備会の方から講演のお話をいただいた時にその印象を確かめる作業をしてみました。ほんの少しの期間でやったものですからおおざっぱなんですけど、この準備会では系譜の科学的研究をめざしているということで、私もそれには大いに賛同するところです。「科学的な研究をするための１つの基礎づくりをするためのきっかけにでもなれば」ということで確認作業をしてみました。

資料の１６ページの表をご覧ください。「二神家系図由緒書き関係資料一覧第１文書分」とあります。これは二神司朗家の第１文書の中から気が付くかぎり私が引っ張りだしてきて一覧したものです。まだ、漏れはあると思いますけれど１８点見つかりました。現時点での報告ということになります。こうやって並べてみるといろんなことが分かってきます。ぱっと見て作成書写年代とあります。系図というものは必ずどこかで誰かが作ってそれが決定版として残るとは限らないわけです。それを写したりして代々伝えていくという性質の資料ですから、必ずしも作成年代というふうにはならない。それで、作成書写年代のほとんどが安永年間が多いということが分かります。そしてもう１つ簡単に分かるのは作成書写者、それも一目で「二神新四郎藤原種章」という人の名前がずらっと並んでいます。

そして、６番目に「由利島」という史料がありますが、この作成者は単に「新四郎」となっていますけども、この「新四郎」という名前を使った人はほかにもいるようですが、この時期であるならばこれも種章という人になります。何も書いていない筆写者は誰なんだろうかと、これも調べて見ました。何も書いていないのは筆跡鑑定みたいなことをしてみたんですね。その例として１７ページをご覧ください。まず、どういうふうに鑑定したかというと、作成筆写者、それが確実に種章であるということ。それがわかっている史料とわからない史料とを比較するという形で検討してみました。

ちなみに、矢印の書いてあるところは「かくのごとくつかわすべく候えども、先方資料気に入らず候ゆえ遣わさず候」というふうに書いてあるんです。これは先程の表の１６番にありますが、二神藤右衛門種章という人が、饒豊田家に対して送ろうと思って書いたものなんです。ところが、この種章さんは饒の豊田家と話をしたところ意見が合わなかったらし

いんですね。それでこの系図は持ち帰ってしまったというものなんです。①と②の二重線の文字を比べていただくとほぼ同筆といっていいですね。③のほうはこの波線を引いたところを①で探してみてください。これもまた同じ文字であるということが分かります。あとのものもこういう方法で調べたところ、種章さんが全部書いているということです。

そしてもう１つ、一番上の１番「二神藤原氏子孫系図次第」があります。これは享保１１年８月の作成書写年代をもってます。１７３２年ですから、種章さんが主に系図関係のものを作ったり集めたりしていた１７７０年代よりも４０年くらい前ということになってしまいます。しかし、この１番にしても筆跡から種章さんが写したものであるということがわかりますので、おそらく安永ころになって種章さんが享保１１年に作られた系図を写したんだろうということが分かるわけです。したがって、この１８番を除いて、それ以外の系図由緒類つまり二神司朗家に伝わっている、収集・書写・作成したものすべてが種章さんに関係しているということになります。

ただし、誤解をさけるために言っておきたいんですが、「じゃあそれ以前に系図がなくて種章さんがでっちあげたのか」という話にもなりかねないので付け加えておきます。決して種章さんが司朗家の系図をゼロから作り始めたというわけじゃないんですね。これは一般的に言えることなんですけど、通常一族の系図というのは誰かが最初に編集して作っているものでしょうけど、そのあとで常に加除訂正されています。ですから、確実に二神家に関しては中世文書が残っている訳ですから、瀬戸内海の中では名族であったことは確かなので、現存こそしていないわけですけど種章さん以前に古い系図はおそらくあっただろうと考えられます。その古い系図を土台にしながら種章さんは、あっちこちから系図類記録類を見付けてきて筆写して残しているわけです。つまり資料収集を行なっているわけです。

そしてさらに１７ページで見ました②③のように地名とか書籍への線の引き方とか熱心に勉強しているわけです。そういうふうに資料収集をして勉強して、種章という人は系図を新たに編集しているわけです。このように見ていくと、１８ページの④で「藤原氏子孫系図次第」とありますが、これは巻き物になっているものの１つです。巻き物になっているのが４つ二神家ではあります。そのうち常民文化研究所で３つをお預かりし１つを司朗先生にお返ししているんですが、そ

の中の巻き物の４つのうち３つは筆が種章さんじゃありません。しかし、巻き物になっている１つの④の番号をつけたものは種章さんのものなんですね。
　種章さんが作成した系図にも、種章さんの後の世代の人たちが、加筆訂正しています。昨日お伺いしたところによると、司朗先生の伯父さんにあたる仲次郎さんがやはり系図をお書きになっているということです。一族の歴史を考える、系図を作るということを代々繰り返してきたということが言えます。

二神系図

●二神種章という人

　それではどうして種章という人が、多くの系図を集めたり、書写したり、作成したりしたのか。その動機は何だったのかということをお話しなくてはいけないと思います。ではこの種章さんという人がどういう人物であったのかということを確認してみたいと思います。１８ページにいくつか資料をあげています。④は系図で⑤は過去帳です。実はこの過去帳も安永年間に最初作られたものです。安永２年（１７６５）に種信という方が亡くなっていますが、その長男として種章さんは生まれています。その子どもが種房です。⑤の過去帳によりますと、種章は寛政６年（１７９４）に６１歳で亡くなっています。享保１９年頃（１７３４）にお生まれになった方だということがわかります。
　種信さんが亡くなる前に種章は「村用」などを務めるような形で、村や家の事実上の中心人物になっています。そして、それは享保１９年頃に生まれたのが確かならば、２０代後半

からということになります。そして系図がたくさん作られた安永期ですけど、この頃は３０代の終わりから４０代の前半という働き盛りです。彼が家や村の運営を中心になってやっていた時期が、系図作りの時期と一致しているわけです。ということは､多忙な時期に系図の編集に取り組んだわけです。彼を駆り立てたものは一体何だったんでしょう。その中でおそらく関係があるのは､１６ページで言うと６番と７番。「由利嶋」というのと「由利嶋録」だろうと思います。

由利島(左側)　　二神島(中央右)

●種章と由利島

由利島は近世には、二神島・二神氏が支配をしていた島だったんです。網野先生によると、まだ確認されていないんですけど二神氏による由利島の領有の歴史的な淵源はおそらく中世まで遡るだろうというふうに考えられてます。６番と７番の史料によりますと、由利島は古くは「由利千軒」と呼ばれているほど繁栄した時代がありました。「由利千軒」つまり、小さな島に千軒はあるんじゃないかというくらいたくさんの家が集まっている、そういう時代があったんです。おそらくは中世瀬戸内海の海上交通の拠点（領地）として都市的な（港町）場になっていた可能性が十分にある。そこをおそらく中世になり、この地域の「海の領主」であった二神氏が押さえていた。　ところが、問題は江戸時代の明和５年（１７６８）、ここでは由利島の一件と表現しておりますが、二神氏にとって大変な事件がおこります。どんなことかというと、『松山藩が由利島を交易のために召し上げる』と言い出したんですね。そうしましたら種章は驚愕して、松山に出向いて由利島がいかに二神島にとってどれだけ大切な島であるのかというようなことをいろいろ書き綴った願書を提出して、必死で藩に抵抗したんです。藩の役人はそれに対して脅

しともとれるようなことを言うんですけども種章は決死の覚悟だった。命懸けで闘ってその主張を通し、結果的に種章は由利島の支配権を維持しました。そして、今までどおりの持ち分が決まったんですけど１６ページ６番の史料は、そのために由利島に関する資料をたくさん集めたんだろうと思います。その証拠資料が大量に書き留められています。

種章が決死で臨んだ由利島の領有権の主張の背景には、二神家がまさに海の領主として活躍していた中世の二神島と由利島の関わりにまで遡る根の深い関係があったと推測されます。そうすると先祖代々我が一族の支配の地であると考え伝えられてきた島が、交易のためだといって藩に取られるわけにはいかないというふうに考えても不思議ではないと思います。そしてそのことが、由利島が一族の歴史と深く関わるものであるならば、種章にその一族の歴史を含めた解明に突き動かすということは十分に考えられるだろうと思います。この由利島に関してはもう少し掘り下げていくと深い問題が出てくるだろうと思いますが、この由利島に関する問題が種章にとって一族の歴史を解きあかそうという動機づけになった事件の１つであろうと思います。

●豊後久留島二神氏、二神島の種章を訪ねる

それからもう１つ、これは常民文化研究所でお預かりしている史料からご紹介いたします。１８ページの⑥を見てください。これは「覚」と書いてありまして、その横に「豊後久留島信濃守殿御家中物頭役　得能新三郎殿　子息二神国次殿」と２人の名前があり説明書きがあります。「右は安永六年酉四月四日右新四郎殿二神島へ船繋ぎ致され候う由にて当家へ尋ね参らる元来当家の末葉に候の由申され当家の系図披見致される由につきかれこれ相尋ね候のところ二神隼人佐通範よりの末孫久留島信濃守殿へ有付奉公相務め申され候由」というふうに書かれています。

安永６年（１７７６）に、九州豊後森久留島藩の家臣になっていた新三郎と国次という一族の親子が船に乗って二神島へ尋ねてきています。そしてその人たちの話によると「隼人佐通範の末孫で、つまりあなたたち（二神司朗のご先祖）が元祖ですよ」ということを言って、そのあと二神家にあった系図とかいろいろと資料を見ています。ただ、お父さんは得能新三郎と名乗ってますけど、これは藩主が家督のものは得能を名乗りなさいと言われたことから名乗っていて家督の者以外は二神を名乗っています。このことが切っ掛けとなりま

して、久留島二神家と二神島の二神家はその後も文通などをしてつながりを持っています。
　その下の⑦は、文政５年（１８２２）に再び豊後森の二神瀬兵衛種村という人が二神島を尋ねています。たまたまこの時、「ご当主はお留守で会えなかった。残念でした」ということを書いて二神家に残しています。つまりこの時期、二神種章家と九州の二神家が交流を持っていたということがわかります。

●種章、由利明神を再建
　それから、１７ページの①を見ていただいてもわかるように、これは饒の豊田家に渡そうとして結果的に渡せなかったものですけども、饒の豊田家にこういう系図を作ったから後を書き継ぎなさいというように、ほかの一族に対して種章がこういうアクションを起こしていた可能性だってあるんじゃないかというふうに思われるわけです。そうすると、こうした由利島の件とか自分の一族の傍流にれっきとした武士がいるということを種章という人は非常に大きなものと感じ取ったに違いありません。それで自らの一族の歴史を解明しようということに拍車がかかったというふうに考えられますせ。そして、由利島に関しては危機を免れ、自らの支配を維持できたということの証であるとか、１９ページにありますが由利明神という神社を再建するんですね。その神社に棟札を安永４年（１７７５）に残しています。
　その棟札を見ると、⑩と⑪がその史料なんですが、⑪をご覧ください。建築史の西和夫先生が写したものですけど、真ん中より左側に「一建立願主二神嶋の住庄官二神新四郎藤原種章同嫡藤原種」と署名をしています。この新四郎種章こそがさきほどの種章です。ここで注目したいのは、「庄官」という肩書きです。この「庄官」というのは、⑫でも確認できました。これは江戸時代のお菓子の袋なんですが、それに系図とか書類を種章さん入れていたらしいんです。⑬も種章さんの文字なんです。「庄官」以降、「拝領物書き付け」と書いてあります。「庄官」というのは、中世に荘園というものがありましたけど、荘園を荘園領主から委任されて管理する役職のことです。つまりは、自らは中世以来の伝統をひく海の領主、武士である、そんな意志が非常に強く、この種章さんにはあったのでしょう。現自体は村の庄屋であり百姓であるけども、実は単なる庄屋ではないんだという自己認識を強く持っていたように思います。とするならば、一族の系図作

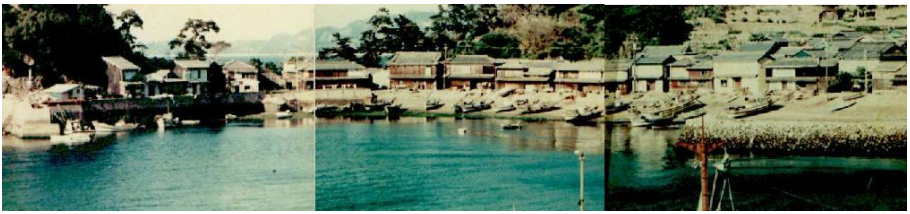
りをしたというのは、種章さんの心、自己認識を確認していくためだったのではないかと考えられます。

●現当主二神司朗氏の名も「種章」

最後になりますが、この準備会の名誉会長である二神司朗先生は「藤原種章」と言い、安永の種章とまったく同じ名前を別にお持ちだということを伺いました。期せずして、司朗先生がいらっしゃる時にこの会が発足して二神氏の系譜・歴史を研究なさろうとしているわけです。安永の江戸時代に二神種章というエネルギッシュな人物がいたわけですが、そういう意味ではそんなエネルギッシュな人物に負けないくらいのことはこの会でできるだろうと思います。昨日からお邪魔していますけども、正直言ってこの会の皆さんの活力には圧倒されております。この会は単に活力を持っているだけでなく、科学的な面で研究をしようとおっしゃられているので、ぜひ期待したいと思います。

そして、これだけの二神氏のネットワークができている訳ですから、この際系図の記載をただ鵜呑みにするだけでなく、その中に何が書いてあるのか、皆さんお持ちの系図を集めて比較検討していただくといいと思うんですね。もし系図や古文書をお持ちでしたら、ネットワークが作られている最中ですから、系図と古文書をセットで比較検討してみてください。そうすると、どんな系図とどんな系図が親戚で、従兄で、子どもでというように関係がわかってきます。そうすると、書いてある内容そのものを真実としてただ受けとめるのではなく、もっと広がりのある壮大なスケールで、系図・系譜研究ができるだろうと思います。そういうことも科学的な研究の１つではないかと私は考えています。それを果たすことは、江戸時代の種章以上の偉業を現代の二神一族の皆さんが二神一族の社会的評価を高めることに繋がるのじゃないかと、そういうことを信じています。

また、私方としましても、１日も早く二神司朗家の整理を完成させてその成果を還元して、この会の皆さんと協力関係を作っていきたいと考えております。それから、常民文化研究所が現在検討中の二神家墓地の考古学的な調査があります。これについても、皆様のご支援をいただければと改めてお願いして、非常にだらだらとした話になりましたけど、今日の結びといたします。どうもご静聴ありがとうございました。



事務局連絡
　当日配布しました資料の全てを出せませんでした。
資料のコピーが必要な方は事務局までご連絡下さい。
なお掲載しています資料は文中の１６ページと書かれているものです。

二神家系図・由緒書関係史料一覧（第1次文書分）

No.	標　題	作成・書写年代	作成・書写者	受　取	備　考	第1次
1	二神藤原氏子孫系図之大段次第	享保17．8 (1732)			種永三男・寛隆（慈応）の系図下書（端書のみ）．No.2以下の種章の筆跡に一致	38
2	藤原氏嫡流并豊田二神之子孫系図写	安永5．3 (1776)	二神新四郎藤原種章		「系図写下書」	新出1-2
3	藤原氏豊田二神之嫡流系図　書	安永5．3	二神新四郎種章		「嫡系抜書」	新出1-3
4	藤原氏豊田二神先祖并中興之霊会日年忌禄（録）	安永5．4	二神新四郎種章		過去帳下書か	新出1-4
5	（過去帳）	安永5．仲春日	当主二神藤原種章		後年、加筆あり	
6	油利島（寛文2～安永7）	（安永7）	新四郎			5
7	百合島録	（安永7）	二神新四郎種章			71
8	豊州森久留島信濃守家系図（写）	（安永8．8．10）		（二神種章）		72
9	予陽河野盛衰記（抜書）	安永9．初夏写	二神種章			74
10	予陽河野家譜人数之巻				種章の筆跡	新出5
11	（村上氏系図）				種章の筆跡	312
12	二神家末家之次第	安永10．正	二神藤右衛門種章		「尋古記改之」	76
13	柳原家系譜（下書）	安永10．正	二神藤右衛門種章	（柳原嘉七昌方）		75
14	（柳原家由来書写）				種章の筆跡	313
15	（二神氏系図）	（安永7以降）			記載は種章とその子の代まで．種章の没年なし．種章の筆跡	78
16	（豊田二神氏子孫系図略）		二神藤右衛門種章	饒豊田家	饒豊田家では不受理	77
17	（二神家由緒につき書付）				種章の筆跡か（未確定）	311
18	二神村新四朗由緒親類附	天保5（1834）～				103